

## 愛他性に関する国際比較研究Ⅱ<sup>1)</sup>

——日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランド  
の中学生・高校生を対象として——

松 井 洋

### A Cross-cultural Study of Altruism among the Youths in Seven Countries

Hiroshi MATSUI

キーワード：愛他性，国際比較研究

#### 序

愛他性の定義は研究者によって少しずつ異なっているが、著者らは「その程度はともかく、自己犠牲をはらっても他者のためになることをしようとする態度」と定義している（松井，1996，松井・中里・石井，1998）。このような愛他性が、今日のわれわれの社会において必要とされる特性であると著者が考えている理由は、そもそも、今日のわれわれの社会がかなり重大な問題を抱えているという認識があるからである。例えば、今日、青少年によって行われる、弱者に対して危害を加えるような、あるいは自分の欲求本位の凶悪な事件が多発していること、薬物使用などの非行が増加していること、モラルの低下としか言いようのないような企業犯罪が発生していることなど、表面化したこれらの問題についてはかなりセンセーショナルな報道

---

1) 本論文は、筆者の他、中里至正（東洋大学）、瀬尾直久（青山学院大学）、石井隆之（日本・精神技術研究所）によって行われた研究プロジェクトの成果の一部について分析したものである。

この研究プロジェクトは東洋大学井上円了記念研究助成金、及び川村学園、私学振興財団の研究補助を得ている。関係各位に感謝します。

キプロスの調査は Dr. Lefki Anastaiou、ポーランドの調査は Dr. Andrzej Mirski の協力によって行われた。また、ニューヨーク州立大学バッファロー校の Roger V. Burton 教授には研究全体について協力を受けた。

もされている。人々の目はどうしても、表面化した問題に集まりがちだが、より深刻な問題とは、人々の生きかたや、考え方の変化や歪みではないだろう。つまり、中里・松井（1997）でも指摘したように、上記のような事件や問題の背景には、わが国の社会全般における価値観や道徳観の変化、地域社会の機能の低下、親子関係の歪みなどの問題があると思われる。このような背景のもとに、人々の生き方は即物的、利他的、自己中心的なものになり、また、人間関係に係わる問題が多く生じるようになり、人々は互いに心理的に孤立するようになる。そして、それが結局上記のような事件となって表面化していると考えられる。だから、今日のわが国におけるより深刻な問題は、表面化した事件ではなく、その背後にある人々の生き方や考え方だという認識である。そして、このような、人々がしっかりしたバックボーンを持たず、それぞれのつながりもなく、互いに勝手な生きかたをしている時代であるが故に、自己のことだけではなく、他者のことも思いやるということ、つまり愛他性が重要であると考えているのである。

著者らはこれまで、わが国の青少年の特徴や問題を検討するため、中国、韓国、アメリカ、トルコなどの中学生、高校生を対象にした国際比較研究を行ってきた。これらの研究では、非行許容性、道徳意識、価値観、親子関係、友人関係など広範な問題を取り上げてきたが、中心課題は愛他性にあった。それは、上記のように、愛他性がわが国の社会において最も中心的な課題であると考えてきたからである。

これまでのわれわれの研究成果を概観すると、まず国際比較調査によって、わが国の青少年の愛他性が他の国より低いことが指摘された（中里・加藤・杉山・松井・瀬尾，1990，Nakasato & Matsui, 1993）。また、わが国の青少年についての調査から、愛他行動を行うことの原因が、わが国では情緒的な理由が優勢であり、大学生になってもそれは変わらないことがわかった（松井，1991）。さらに、国際比較研究によって、愛他行動をするかどうかの判断構造には、国や文化を超えた構造がある一方で、中国の場合のように愛他行動の対象が知人か他人かということで判断するような、文化に特有の構造があるということや、愛他性の強さはその愛他行動の種類によって違い、そのことに国による違いがあること（松井・中里・加藤・瀬尾・石井，1995，Nakasato, & Matsui, 1996，松井他，1998），そして、知人と他人とを問わずに愛他行動をする国と、そうではない国があること（松井，1997），さらに、愛他性は共感性、価値観、道徳意識、非行許容性のような個人特性や、親子関係のような環境要因と関係があることがわかった（中里・松井，1997）。

以上の成果のもととなるわれわれの国際比較研究のうち主要な国際比較調査は、これまで2回行われ、第1回は日本、中国、韓国、アメリカの中学・高校生を対象とするものであり、第2回目はこれにトルコを加えたものであった。そしてこの度、キプロスとポーランドについて、

第2回目の調査と同じ内容についての調査が行われ、結果が得られた。

これまでも、国際比較によって愛他性の性質、文化と愛他性との関係、そして、日本の若者の特徴が明らかになってきた。ここでさらに上記の調査対象国を加えるなら、このような成果の真偽を確かめることができるだろう。そこで、本論文では、第2回目の調査国にキプロスとポーランドのデータを加えて分析してみることにした。分析の主要な目的は、愛他性というのが、国によってその性質や強度が違うものなのかどうかということである。これまでの研究では上述のように、愛他性は国によっていろいろな面で異なることが示されてきた。このような愛他性の国による違いが、われわれの研究ではこれまで取り上げてこなかった、地中海の国キプロスや、東欧の国ポーランドを加えた分析でもみられるのかどうかを検討することが本論文の目的である。なお、これらのデータから新たに分析することで得られる知見は多々あると思われるが、本論文では以下の点に絞って検討する。

1. 調査では8種類の状況についての愛他行動について調べているが、国別に見た愛他性の強さは、ある国では特定の愛他行動の状況でのみ強い、あるいは弱いなど、状況によってそれぞれ違うのだろうか。

2. 上記の愛他性の強さの違いは、知人に対する場合と他人に対する場合では異なり、国によって両者が同じような強さである国と、知人に対する場面で特に強い国があると思われるが、キプロスやポーランドではどのようなようになるのだろうか。

3. これまでのわれわれの研究によれば、日本の中学・高校生のみが、愛他行動の理由として「かわいそうだから」というような情緒的な理由を多くあげる傾向があるが（松井，1991，Nakasato & Matsui, 1996, 松井他，1995），これは日本に特有のことなのか、それとも、キプロスやポーランドでもみられることなのか。これについて、Eisenberg（1986）による愛他行動の道徳的推論の発達段階説によれば、愛他性の理由は、自己中心的なものから、共感のような対人感情を経て、義務感などの自己の信念に基づくものに発達していくことになる。そうすると、日本における情緒的な理由の優勢は発達段階の問題なのかということにもなる。あるいは、東（1995）が言うように、日本の親は情緒的しつけが多い故に、日本人のこのような判断過程は情緒的になるというように、日本特有の事なのであろうか。この点についてキプロスやポーランドを加えた分析によって検討してみる。

## 方 法

## 1. 調査対象者

調査対象者は Table 1. のように、松井（1997）で用いた、日本、米国、中国、韓国、トルコの 5 か国に、今回キプロスとポーランドを加えた、中学生、高校生 6055 名である。なお、調査対象者の属性別に、中学生と高校生、男性と女性の比較等が可能だがここでは取り上げず、国別の比較のみ行う。また、各調査項目には欠損値があるが、本論文ではそれらを除いて計算を行っている。

Table 1. 調査対象者

国	日本	中国	韓国	アメリカ	トルコ	キプロス	ポーランド	合計
人数	1232	816	739	1671	676	500	421	6055

## 2. 調査時期

日本、米国、中国、韓国は 1993 年、トルコは 1994、キプロスとポーランドは 1997 年に調査を実施した。

## 3. 調査方法

質問紙調査を各学校の教室において、各国の調査協力者が実施した。

## 4. 調査内容

愛他性について以下のように、各種の愛他行動が要求される場面を短い物語にして、対象者に提示した。なお、以下の状況の作成については高木（1982）を参考にした。

状況は「緊急援助」（学校に行く道で、前を歩く人が倒れた）、「援助」（混雑するバスの中で座っている時に、前に老人が立った）、「分与」（登山の途中、残り少ない水を分けてほしいと頼まれた）、「寄付」（友人の親が事故で倒れたので、友達が集まりお金を寄付することになった）、「奉仕」（休みの日に小学校の水泳の練習のボランティアを頼まれた）の 5 種類の愛他行動に関するもので、「寄付」と「奉仕」を除いては、相手が「知っている人」の場合と「知らない人」の場合のそれぞれを設定したので合計 8 状況となる。

これら 8 状況について、「助けてあげる」、「わけてあげる」、「手伝ってあげる」など、直接自分が愛他行動をするという内容から、愛他行動を全くしないという内容までの選択肢を各々 4 つ設けて 1 つを選択させ、順に 4 点から 1 点に得点化した。

また、4 選択肢のうち、何らかの愛他行動を少しでもしようとする 2 つの選択肢を選んだ場

合には、その行動をする理由を4つあげて1つを選択させた。理由のうち2つは「困っている人を助けるのは義務」と「人を助けるのはよいこと」など、義務や責任によるという理由で、これらを理性的理由とした。2つは「倒れた人がかわいそう」と「その人が苦しんでいるから」など気持ち・情緒に訴えるというものであり、これらを情緒的理由とした。

なお、本調査では、愛他性以外にも非行許容性、道德意識や性格要因、環境要因等について合計117項目の質問をしているがこれらの結果については別に報告する予定である。

また、質問内容の言語による違いを最小にするために、各国の調査協力者によって質問内容についての討論を行い、さらに、翻訳については各国の複数の研究者の校閲を得て調査票を作成したが、キプロスとポーランドの質問紙は英文の質問紙を基にしている。

## 結 果

### 1. 8 状況別の7か国の中学・高校生の愛他性の強さの比較

7か国の愛他性の強さの比較を、愛他性全体と、8状況別に素得点平均を算出してTable 2. に示した。Table 2.の値が大きいほどその場面の愛他性が強いことを示している。

愛他性の全体の強さを示す愛他生得点の合計は、トルコが最も高く、次いで、キプロス、ポーランド、中国、アメリカ、韓国、日本の順になる。

愛他行動別に見ると、「緊急援助」については、トルコが最も強いが、ポーランドもトルコに近い強さであり、キプロスもポーランドに次ぐ強さである。後は、アメリカ、中国の順で、日本と韓国が最も弱い。「緊急援助」全体ではこのような順になるのだが、これを愛他行動の相手が「知人」と「他人」である場合を別々に見ると、もちろん、どの国でも「他人」より「知人」に対する愛他性が強いことは共通しており、これは「援助」や「分与」でも同じであ

Table 2. 国別の愛他性得点

国	緊急援助		援助		分与		寄付	奉仕	合計
	(知人)	(他人)	(知人)	(他人)	(知人)	(他人)			
日本	3.40	2.99	3.67	3.18	2.94	2.50	3.25	2.47	3.05
中国	3.65	3.16	3.65	3.16	3.39	2.74	3.64	3.23	3.33
韓国	3.57	2.72	3.77	3.15	2.98	2.29	3.32	2.71	3.07
アメリカ	3.73	3.34	3.38	3.25	2.90	2.22	3.25	3.06	3.15
トルコ	3.87	3.67	3.84	3.80	3.26	3.06	3.64	3.41	3.57
キプロス	3.74	3.54	3.78	3.72	3.32	3.05	3.68	3.09	3.49
ポーランド	3.82	3.64	3.78	3.64	3.33	3.07	3.30	2.76	3.42
7か国計	3.66	3.24	3.63	3.34	3.09	2.58	3.39	2.94	3.24

り、どの国でも、どの状況でも、「他人」に対するより「知人」に対するほうが愛他的である。しかし、その程度は国によってかなり異なる。愛他行動を「する」か「しない」に2分した場合の「知人」、「他人」の間の $\chi^2$ 値は、日本75,075、中国92,716、韓国154,455、アメリカ49,828、トルコ8,097、キプロス6,066、ポーランド2,541 ( $df = 1$ )となる。韓国、中国、日本、そして、アメリカも「他人」と「知人」の違いが大きく、言い換えれば、知っている人には親切だが知らない人には冷たいという傾向が見られる。しかし、ポーランド、トルコ、キプロスはその差は小さく、特にポーランドは「知人」、「他人」の間に有意な差がなく、知っている人にも知らない人にも親切とすることができる。

「援助」については、やはりトルコ、キプロス、ポーランドが強く、韓国、日本、中国がそれらの国に次いで、アメリカは最も弱い。ここで特徴的なのは、「知人」に対する援助については国の間の差は大きくないが、「他人」に対する援助にはかなりの差があるということである。「知人」、「他人」の間の $\chi^2$ 値は、日本158,552、中国94,568、韓国113,595、アメリカ108,400、トルコ1,632、キプロス10,720、ポーランド1,433である ( $df = 1$ )。つまり、日本、中国、韓国、アメリカは「知人」には援助するが、「他人」にはあまり援助しない。この典型が韓国であって、「知人」に対する援助はほとんどトップクラスだが、「他人」に対しての援助は最低である。しかし、ポーランド、トルコ、キプロスは「知人」-「他人」の差が小さく、特にポーランドとトルコは、「知人」-「他人」の間に有意差がなく、どちらに対しても援助的である。

「分与」については、「緊急援助」と「援助」に比べると全体的に値が低く、「援助」の小さな親切や「緊急援助」という場合より、「分与」の場面のように、自分のものを他者に与えることのほうが難しいことのようなものである。国別には中国、トルコ、キプロス、ポーランドが強く、日本、韓国、そしてアメリカは弱い。そして、「知人」-「他人」間の $\chi^2$ 値は日本140,750、中国148,605、韓国178,855、アメリカ445,280、トルコ25,335、キプロス35,853、ポーランド29,129である ( $df = 1$ )。つまり、アメリカ、韓国、中国、日本の順で「知人」と「他人」の差が大きく、他はそれほどは大きくないが「緊急援助」や「援助」より、どの国も「等人」と「他人」との差が大きいという傾向がある。

「寄付」はキプロス、トルコ・中国、韓国、ポーランド、日本・アメリカの順であり、国のあいだの差はそれほど大きくない。また、ポーランドの愛他性はこれまでの他の状況ではかなり高かったが、この「寄付」の状況では愛他性は7カ国の平均よりも低い。

「奉仕」はトルコ、中国、キプロス、アメリカ、ポーランド、韓国、日本の順で、日本は特に低い。ここでもポーランドは7カ国の平均よりも低い。

## 2. 知人援助と他人援助との愛他性の比較

前述のように、同じ「緊急援助」や「援助」でも、知人に対する場合と他人に対する場合とでは、愛他性の程度がかなり異なることがあり、「知人」に対する愛他性が「他人」に対する愛他性より強い場合が多く見られた。そして、この傾向は国によってその程度が異なっていた。つまり、「知人」にも「他人」にも愛他的と言える国と、そうではない国があった。そこでこの国による違いを明確にするために、愛他性の得点を「知人」と「他人」別に集計してみた。集計したのは、「知人」の場合、「他人」の場合両方について聞いている「緊急援助」、「援助」、「分与」の3つの愛他行動についてである。この3状況について「知人援助」、「他人援助」別に平均値を算出し、また、他人／知人の比も求めた。結果はTable 3.のようになる。

たとえば、トルコは知人援助は3.66であり、他人援助は3.51であり、2つの値は接近している。反対に、韓国は知人援助は3.44とほとんど7か国の平均と同じ値だが、他人援助では2.72と7か国中最低になる。このことは他人／知人の比からもわかる。トルコ、キプロス、ポーランドの3か国は、他人／知人の比が0.95以上でありほとんど1.0に近い値である。つまり、他人に対する愛他性と知人に対する愛他性が非常に接近していて、知人にも他人にも愛他的とすることができる。ところが、韓国ではこの比は0.79になり、知人と他人の差がかなり大きくて、知人には愛他的だが、他人には愛他的でないと言することができる。この韓国のような傾向は中国にもみられ、日本にもやや見られる。アメリカは両者の中間である。

## 3. 愛他行動をする理由

ある状況で愛他的に行動する場合その理由、すなわち動機はどのようなものであろうか。人によっては義務感から、人によっては同情から愛他行動をするように、愛他行動の理由はそれ

Table 3. 知人援助と他人援助の比較

国	知人援助	他人援助	他人／知人
日本	3.34	2.89	0.865
中国	3.56	3.02	0.848
韓国	3.44	2.72	0.790
アメリカ	3.34	2.93	0.877
トルコ	3.66	3.51	0.959
キプロス	3.61	3.43	0.950
ポーランド	3.64	3.46	0.950
7か国	3.46	3.05	0.881

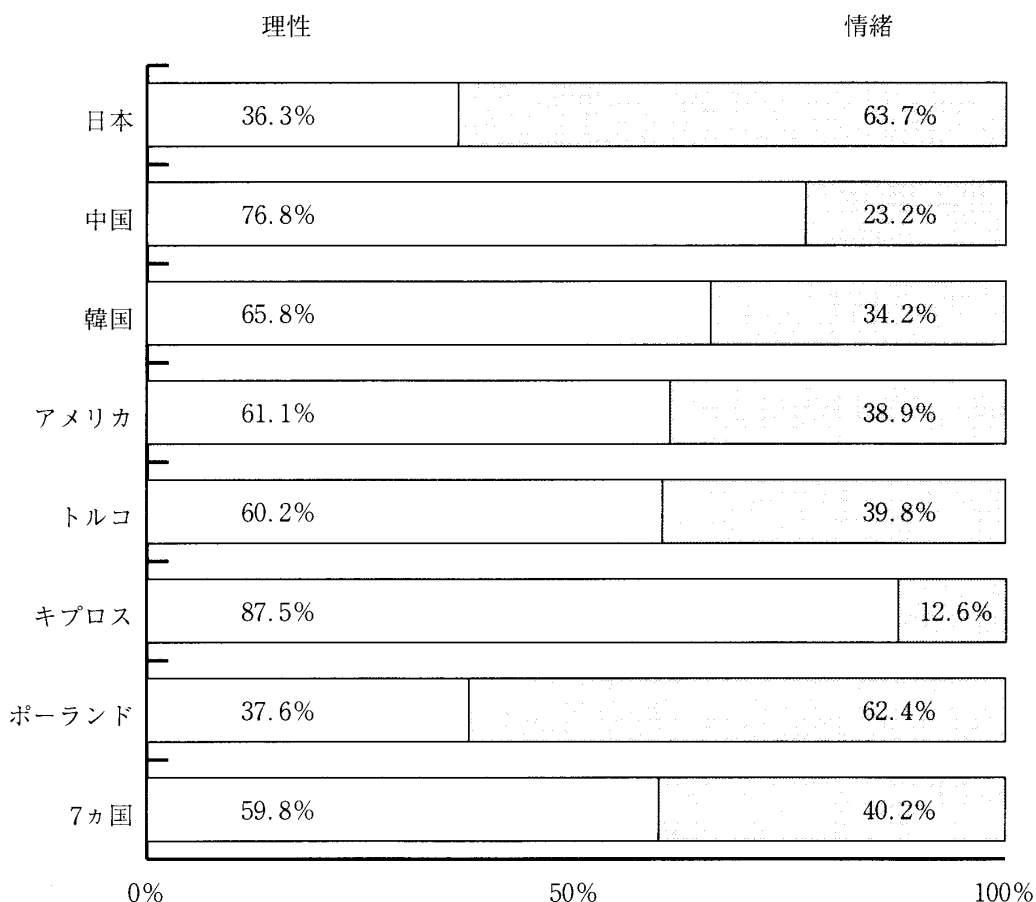


Fig.1. 愛他行動の理由

それぞれ異なるはずである。前述のように、本調査では8つの状況で、愛他行動をすると答えた場合、そのような行動をする理由を聞いている。そして、その理由を義務、責任などの「理性的な理由」と、同情、共感などの「情緒的な理由」にわけている。ここでは、8つの状況における、「理性的な理由」と「情緒的な理由」のそれぞれの総頻度の割合を算出して、Fig.1.に示した。

7か国全体の割合は、Fig.1.のように理性対情緒でほぼ6対4になり理性型が優位である。7か国の中では特に、キプロスは理性型の理由の割合が高い。中国もキプロスに次いで高い。韓国、アメリカ、トルコはどちらかというとな理性型が優位である。情緒型が多いのは、日本とポーランドで、その割合はほとんど同じである。理性的理由と情緒的理由の頻度の検定に基づいて、国の間の順位をつけると、理性的理由が多い順にキプロス>中国>韓国>アメリカ≒トルコ>ポーランド≒日本 (キ・中  $\chi^2 = 145,735$ , 中・韓  $\chi^2 = 131,001$ , 韓・ア  $\chi^2 = 26,076$ , ア・ト  $\chi^2 = 1,156$ , ト・ポ  $\chi^2 = 340,601$ , ポ・日  $\chi^2 = 1,379$ , いずれも  $df = 1$ ) となる。愛他



行動の理由は国により異なるが、アメリカとトルコ、そしてポーランドと日本は理性－情緒の割合に差はない。

このように、愛他行動の理由が情緒的であるという日本の特徴は、これまでの研究では日本独自の傾向とも思われていたが、ここで、日本と全く同じといってよい傾向がポーランドにも見られたわけである。

## 考 察

本研究の目的は、愛他性が国や文化によって異なるかどうかということ、キプロスとポーランドの対象者を加えて検討することである。この点について、以下の3側面から考察する。

まず、第一に、本研究では8種類の状況における愛他行動について調べているが、国別に見た愛他性の強さは状況によって違うのか。ということの検討である。

愛他行動の状況の違いによる、愛他性の強さの違いについての結果を、国別に簡単にまとめてみると以下のようなになる。

日本は、8状況全体の合計で愛他性が最も弱い。知人に対する援助のみ平均を上回るが、他は平均以下で、特に奉仕が弱い。

中国は、8状況全体の合計で愛他性は強いほうで、寄付、分与、奉仕は平均を上回るが、他人に対する緊急援助や援助は平均を下回る。

韓国は、8状況全体の合計で愛他性は日本に次いで弱い。知人に対する援助のみは平均以上だが、他は弱く、特に他人に対する緊急援助が弱い。

アメリカは、8状況全体の合計の愛他性は平均よりやや下である。緊急援助と奉仕は平均以上だが、他は平均を下回る。

トルコは、8状況全体の合計の愛他性が7か国中一番強く、全ての状況で平均を上回る。特に、緊急援助、援助、奉仕は強い。

キプロスは、8状況全体の合計の愛他性がトルコに次いで強い。全ての状況で平均を上回る。特に、援助や寄付は強い。

ポーランドは、8状況全体の合計の愛他性がトルコ、キプロスに次いで強い。緊急援助、援助、分与とも平均を上回りかなり強い愛他性を示す。しかし、寄付と奉仕に関しては平均より弱い。

以上のように、愛他性の強さは国によって違うが、同時に、愛他行動の状況によってもそれぞれに異なっていると言えるだろう。このことは、愛他性というものが、たとえばアメリカで

は緊急場面で人を助けたり、ボランティア活動をすることと言う面で発揮されることであり、韓国では身近な人に対する小さな親切という形で発揮されることであるように、国や文化によって質的に異なるものだというを示唆している。このことをキプロスとポーランドにあてはめてみると、どちらの国の中学生・高校生も全体に愛他性が強いということでは共通している。しかし、寄付と奉仕についてみると、両国の若者は対照的な傾向を持つ。キプロスはこの二つに関しては平均以上の愛他性なのに、ポーランドは平均以下である。特に、寄付では、キプロスが7ヵ国で最高の愛他性を示すのに、ポーランドは下から数えたほうがはやい。

このように、キプロスとポーランドを加えた場合でも、愛他性の強さは状況によって異なるものであり、そして愛他性が強い状況、弱い状況は国によって様々に違ふと言えよう。

愛他性が国や文化によって異なるか否かということを検証するための、第二の切り口は、知人に対する愛他性と他人に対する愛他性の比較を行うことである。結果は、トルコ、キプロス、ポーランドの3か国では、愛他性の強さが、知人 他人比で、0.95以上になり、この3国では、他人に対してより知人に対してのほうが愛他性は高いが、その差は非常に小さいものであると言える。この3国の中学・高校生の対象者らは、愛他性の強さも高いので、知人に対しても他人に対しても愛他的な人々と言えるだろう。それに対して、韓国の知人 他人比は0.79であり、知人と他人とを区別して愛他行動をするかどうか決める傾向が強く、知人に対しては相対的に愛他性が強いが、他人に対しては弱いといえる。この傾向は中国や日本にもみられる。アメリカはこの2つのグループの中間に位置する。

このように、愛他行動の対象が知人か他人かということについても国による違いが見られ、知人にも他人にも愛他的な国や、知人だけに愛他的な国などがあつた。このことは、愛他性というものが、国によっては知人、他人を超えたことであり、国によっては知人か他人かということと密接に関連することであり、これは、文化によって質的に違ふという仮説を支持していると言えるだろう。

知人－他人の問題については上記のように、トルコ、キプロス、ポーランド3国の、知人にも他人にも愛他的なグループと、韓国、中国、日本の3国の知人にはそれなりに愛他的だが他人には愛他的でないというグループに分かれたが、各々の態度の形成要因は何だろうか。この分析は他にゆずるが、今考えられることは、トルコ、キプロス、ポーランドは、宗教や政治的ドグマなどの絶対的価値観が社会にあるのではないかということである。そして、韓国、中国、日本は東洋的な身内意識、つまり氏や血縁などを重視する伝統の反映なのではないかということである。もちろんこれは推測の域を出ない。興味深いことなので今後分析していきたいテーマである。

第三の切り口は、愛他行動を行う理由の分析である。このことと関係が深いのが Eisenberg (1986) による愛他行動の道徳的推論である。彼女の愛他性（向社会的行動）の推論は、コールバーグ (1987) の道徳的推論を愛他性の問題に発展させたものであり、以下のような6段階の発達段階がある。

レベル1. 快楽主義的・自己焦点的指向（道徳より自分の損得や感情）

レベル2. 要求に目を向けた指向（相手の要求への関心）

レベル3. 承認及び対人指向、あるいは紋切り型の指向（良いことの紋切り型のイメージや他人からの承認）

レベル4a. 自己反省的な共感的指向（相手の気持ちへの配慮や罪責感）

レベル4b. 移行段階（内面化された価値、規範、義務、責任）

レベル5. 強く内面化された信念

このような観点から見ると、日本の中学・高校生が情緒的理由で愛他行動をするという傾向は、理性的な理由ですするという国より、発達段階で低いということになる。ほんとうにそうなのか。このような点を明らかにするために、愛他行動の理由の分析を行ったわけである。

結果は、キプロスは理性的理由の割合が大変に高く、次いで中国が高く、韓国、アメリカ、トルコも理性的理由の方が割合が高かった。しかし、日本とポーランドは情緒的理由の割合が高く、この両者の理性—情緒の割合に有意な差はなかった。

この結果は、愛他行動をするときに、情緒的な理由ですという傾向が、日本だけのものではないことを示している。そして、ポーランドの場合は情緒的理由で判断して、なおかつ、全体に強い愛他性を示していた。つまり、情緒的な理由であっても強い愛他性ということがあり得るわけである。このことは、Eisenberg (1986) のモデルのように、愛他性が最後には信念や哲学で判断されるように発達していくものだということを支持しないように思われる。むしろ、愛他性は国や文化によって質的に異なるもので、理性的な愛他性も情緒的な愛他性もそれぞれ愛他性であって、優劣や発達段階の問題ではないということをサポートしているのではないだろうか。

以上の3点から、愛他性が国や文化によって異なるものかどうかという点について考えてきた。その結果は、愛他性は愛他行動の状況や、相手が知人・他人ということについて文化差があること、そして、愛他行動の理由にも文化差があることがわかった。つまり、愛他性は本質的に文化によって異なるものだという仮説をサポートする結果であったと言えよう。

## 引用文献

- 東 洋, 1995『日本人のしつけと教育』東京大学出版会.
- Eisenberg, N., 1986, Altruistic emotion, cognition and behavior. Lawrence Erlbaum Associates.
- コールバーグ, L., 永野重史 (訳), 1987, 『道徳性の形成—認知発達のアプローチ』新曜社 (Kohlberg, L., 1969, Stage and sequence; The cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.), Handbook of socialization theory and research (pp. 325-480), Rand Manally.
- 松井 洋 1991, 『青年期における愛他行動の発達とその規定因』, 川村学園女子大学研究紀要 第2巻 181-193.
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之 1995『愛他性の構造に関する国際比較研究』日本心理学会第59回大会発表論文集.
- 松井 洋 1997, 『愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として—』, 川村学園女子大学研究紀要 第8巻 第1号, 107-119.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 1998, 愛他性の構造に関する国際比較研究, 社会心理学研究 (第13巻 第2号).
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol. 27, pp 562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes—A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths—. *International Journal of Psychology*, vol. 28, pp 48.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久 1990, 『非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として』, (財)日工組調査研究財団委託研究報告書.
- 中里至正・松井 洋 (編著), 1997『異質な日本の若者たち』, プレーン出版.
- 高木 修, 1982, 『順社会的行動のクラスターと行動特性』, 日本社会心理学会編, 『公と私の社会心理学』, 年報社会心理学, 第23号.